



年頭にあたって

明けましておめでとうございます。と言ってはみたものの昨年は当協会もコロナ禍に苛まれ、第73回桜まつり俳句大会の当日の部の中止に続き、秋の市民文化祭俳句大会は全面中止、加えて、今年も梅まつり俳句大会と新年度の桜まつり俳句大会の各当日の部が中止と決まり、まるで新会長は疫病神と言われそうです。そんな中、昨年12月、小田原市制80周年に際し、当協会が同市の教育文化功労賞を受賞したことは、先人のご努力の賜であり、光明を見出す思いであります。今年はこちらをバネに、せめて干支の「丑」の歩みほども活動が回復できたらと、切望しております。会員の皆様には、この一年を通じて、ご健康を第一に、ご健吟を願って止みません。

令和三年 元旦

小田原俳句協会会長 池田 忠山

「俳句おだわら」10句抄(640号より)

佃 悦夫 抄出

秋深しずつとあなたが好きでした
終戦忌人を殺めて生き抜けり
秋暑し一木一草声を出す
揉み消した星占いよ白露かな
急須より果ての一滴夕花野
秋時雨ぐい呑みにある渦模様
一輪の竜胆だった池内淳子
十五夜まで黙っていよう「愛してる」
ばつた飛び老人と猫語り出す
まつすぐが交差している冬青空

池田 忠山 抄出

鈍行のひと駅ごとに秋の声
うすれゆく流離の想ひ温め酒
休み田は風のおそび場赤蜻蛉
つなぎ着て農継ぐ気配天高し
色鳥や揚げて物日の日章旗
黄落や午後の仕事のルージユ引く
種採や空の蒼さが痛きほど
かたわらに亡妻が来ている良夜かな
村芝居小野小町に咽仏
まつすぐが交差している冬青空

牧石美千雄
長谷川きよ志

加藤 富江

和田恵美子

石田加津子

遠藤シヅ子

伊藤 道郎

穂坂志げる

岩楯恵津子

大石 和子

門松 鳳文

神山つとむ

片野 節子

二見 和江

大島美恵子

杉崎 せつ

古屋 徳男

木村 和彦

小野 菊土

大石 和子

流刑の帝

佃 悦夫

梟は流刑の帝知っており
 神無月吾も一頭になりにつけり
 焚火にはただならぬ血紛れいて
 隕石も祖をも曝す寒月光
 寒月光起ちあがりたる剣ども
 寒月光帝入水のマリンスノー
 無明なり伝若冲画の鶴と佇つ
 行き行きて穂芒釈迦の苦行像

初明り

池田 忠山

いちまいの風へひとすぢ初明り
 初夢の母はたうたう振りむかず
 かにかくに七十七歳の初湯殿
 駅伝のゴールを逆さ富士も待つ
 城壁のかくもまぶしき初景色
 富士に松かかれることも淑気かな
 蔓から鳩が出初へ見構へる
 切り結ぶ竹刀に火花初稽古

令和元年度年間ベスト一句集鑑賞

灯ともせばひと間みづいろ盆灯籠

池田 忠山

一年に一度はるばると遠くから来られるご先祖様をお迎えするのに灯籠を灯して家を間違えない様にするのも御霊を敬う思いやりでしょう。掲句の中七の「ひと間」を「仏間」としなかつた処に作者の非凡さが伺えます。又、かな文字の使い方もお見事。漢字とのバランスがよく取れていてとても心に響くものがあります。御先祖様を大切になさっている作者の気持がひしひしと伝わってきて印象深い良句でした。(澤口文子)

ヒマラヤの麓は小春ロバの列

板谷 雅泉

インド、チベットの間に横たわる「白き神がみの座」と言われるヒマラヤ。八千メートルの巨峰が連なる。麓とはいえ三千メートルを超える高地。たまさかの小春日。荷役のロバにつけた鈴の音が千古の静寂をつらぬいて響き過ぎていく。牧畜で生計を立てる閑かな暮らしぶり、人々の安寧まで見える。山岳民族の楽天地、大パノラマを描いた佳句。素晴らしい。私も麓の風に吹かれてみたい。(田中幸子)

スキップは兄より上手春の水

岡田 典代

神の楯

新井たか志

天狼や一夜の宿に時止めて
旧友に自愛と結ぶ暮れの筆
杉玉の間口六間冬日差す

夕日まだ沼を離れず浮寝鳥

三島忌の風一陣のドラマかな

段畑の柔ら日満ちし冬苺

コロナ禍や神の楯欲し十二月

日曜のミサの調べや冬のばら

東から

大石 雄介

こぞことし寝ている蜘蛛を起こさぬよう

初夢は山羊の頸を抱いていた

大きな川に乗せて見ている初日の出

元旦の地球が上るごとくかな

人工衛星何度も過る元旦かな

鳴っている二つ並んだ春の口はと

東から来る翻車魚やせみ鯨

元旦のだいでんきん大臀筋聞こえる

春の土手を駆けっこをしている兄妹。どうしても兄に敵わない妹は、スキップで勝負しようと言う。苦手な兄の前でリズムカルに飛びはねる得意気な顔。季語の「春の水」が二人のこれからの明るい未来を予感して好きな句です。生意気な末っ子だったと反省をすると共に懐かしくいただきました。(石田加津子)

たんぽぽのような子が来て膝の上

加藤まり子

明るく元気な幼児は真にたんぽぽのような存在だ。そんな子が這い這いや伝い歩きをして来て膝の上によじ登って来る。可愛い事この上ない。その重さや微かな乳の匂い等何物にも代えがたく、ぎゅっと抱きしめてやりたくなる。日常誰にもあるちよつとした経験だが、これを句にし得たのはきつと作者の人柄とセンスだろう。そしてなによりも比喩の使い方の巧みさと思われる。(青木たけを)

冬に入りまだ一馬身は秋である

田畑ヒロ子

季節の移行時期は冬の気配を感じつつまだ身ほとりには秋が色濃くある。それが一馬身分(2m強から3mほどか)と言う。作者の感覚の不思議さに惹かれた。これからの厳しい季節を過ごすため持ち主の元に戻る牧帰りの馬が秋天の下、自由に駆け廻っていた広い野

返り花

木村 和彦

蛇穴へおまえも後期高齢か
もう少し生きてみたくて寒卵
密葬の友へ手向けの木の葉髪
歌垣の筑波の里の麦を踏む
山茶花と默契をする女の子
いもうとがいちばん怖い石路の花
塩味が少し足りない零余子飯
昼酒に酔っているのか返り花

春を待つ

瀬戸 悠

元旦や十指ひらきて日に当てる
それぞれの灯に帰る寒さかな
室咲やおのれ欺くことありや
酔海鼠をすすりて低体温症
冬薔薇や抜ける碧とは空のこと
しんしんと星降る軒の凍豆腐
柗挿す門にひらけし日本海
出し物は舌出し三番叟春を待つ

原に想いを残しているような感じを浮かべたがそれでは馬に囚われ過ぎだろうか。(池田令子)

冬に入りまだ一馬身は秋である。

田畑ヒロ子

何かを決心したとき、整理できていないことを引き摺りながらも、第一歩を踏み出さなくてはなりません。その引き摺っている諸々の事情を「一馬身」としたのだと思います。さらに、颯爽と走り抜けるサラブレットのすがたを思いうかべました。にんげんにも、美しさは求められるものだと思います。形容動詞である「まだ」についても違和感は覚えませんでした。

(瀬戸正洋)

敬老の日や曾我物の児童劇

鳥海 壮六

さぞや皆様喜んだことでしょう。私も見たかったです。むかし絵本で十郎五郎が雁が飛んでゆく空を指さして……最後は白刃に雷が落ち……そんな情景を記憶しています。

後年曾我の傘焼きで孫に曾我兄弟の話をしたことがあります。父を亡くした十郎五郎のお母さんが曾我太郎祐信に再嫁し、そこで兄弟はどんな日々を過ごしたのだろうかとか。それから十八年後父の仇討を果したことなく……私達が住んでいる相模の国には兄弟にま

実千両 鳥海 壮六

駅前ビルに図書館冬灯
蜜柑挽ぐ日は函嶺の上にあり
箱根山夕陽隠れの冬至かな
口ずさむ昔の校歌七日粥
五万米噛む妻の丈夫な歯を思ふ
水鳥に松の影あり新ホール
味噌汁の油揚美味し雪催
凶らずも米寿の祝実千両

立春句会のお知らせ

日時 令和三年二月三日（水）雨天決行
集合 小田原城天守閣本丸広場前 十一時
・短冊つるし後句会場にて投句
会場 小田原市民センターUMECO第2会議室
会場利用時間 13時～16時（受付13時～）
会費 五百円（賞品代等）
投句 当日囁目3句を短冊（受付にて配布、締切
13時30分）
句会 14時より総互選

つわるいろいろなことが残されています。俳句では「
虎が雨」相撲の「河津掛」、足をのばせば河津の神社
の「力石」などなど。

この十五音でいろいろな思いがふくらみました。最
後に私事になり恐縮ですが五十数年前、病院で隣り合
せた人が十郎五郎の義父、曾我太郎祐信の直系の人で
あったこと。本当の話です。（尾崎一夫）

喜寿傘寿子等に誘はれ春の旅 宮崎 悦女

お健やかなご夫婦、お互いに人生色々な事があつた
が二人ならばこそ乗り越えてこられた。でも自分達で
はもう旅行にも行けない。そんな折、子供達から旅行
の誘いを受けた。「有難い」新しい出合を求めて心が
弾む。まだまだ日本でも行っていない所が多くあるか
ら……きつと楽しい思い出が沢山出来た事でしょう。
「いつまでもげんきでね」という声が聞こえて来そう
でほのぼのとした気持ちになりました。（豊田幸枝）

（✓12ページよりつづく）

蓑宮わか抄出（村場十五）渡辺喜久枝

投函のあとのためらい風花す 山口 千代
藤浪の夫へひとりの櫂を漕ぐ 山崎 悦子
有りのまま暮す気構え十二月 和田恵美子

伊藤はる子句集『春湖』評

駄弁を開けば 長谷川きよ志

「伊藤はる子さんの快活、大らか、そして素直なご気性は誰もが知るところである。そのはる子さんがこの度古希を迎える記念にと、句集を刊行した事は喜ばしくご家族やお仲間の笑顔が浮かぶようである。」

奥名春江主宰の「序」の冒頭部分を引用した。

その序文を繕きながらはる子さんの経歴を辿りつつ折々に詠んだ俳句を鑑賞してみたい。

はる子さんは昭和二十六年、小田原市国府津生まれ。昭和四十九年、医師のご主人と結婚、横浜に住む。

薔薇の香のふはりと医師の白衣かな

凜凜しいご主人の白衣姿、傍に寄れば薔薇の香りが仄と漂う。昼の休憩を終え診察室に戻るご主人、病院の中庭には色取り取りの薔薇が咲き誇っていた。

はる子さんは祖父、父とも開業医、ご主人もご両親は開業医、はる子さんの父上の医院を引き継ぐ形で、昭和六十二年、ご主人と共に国府津の実家に戻る。

以後、医院の手伝いと子育て等で多忙となり俳句から遠ざかり横浜で参加した句会を退会した。

病院の混み合ふ釣瓶落としかかな
オブラートに散薬包む寒さかな

医院の戸叩ける息の白さかな

多忙極まる病院の中、寒さに凍える手で散薬を包む彼女の仕事振り、そして息急ぎ切つて来る急患の対応等、医院の様子が見て取れる。平成十一年、お仲間の紹介で「春野」に入会。黛執先生のご指導を受け、同二十四年、小田原句会の幹事を引継ぐ。以来彼女の俳句の骨法を踏まえた完成度の高い作品（春江評）で頭角を現わし、平成二十六年同人に推挙される。

ところで冒頭でも触れたが、はる子さんは太平洋を遥かに望み、相模湾を眼下に見おろす風光明媚な国府津の高台に居住している。

行く秋のひたすら海を見てをりぬ

東方へ眼をやれば三浦半島、その先に房総半島を望む。一方西方に眼を転ずれば

わが立てる真鶴岬が二つにす

相模の海と伊豆のしらなみ

与謝野晶子

箱根路を我越えくれば伊豆の海や

沖の小島に波の寄る見ゆ

源 実朝

夫々の古人の人口に膾炙した名吟の景勝が広がる。

雁渡しますます蒼き伊豆の海

海が何時も青いとは限らない。季節によって、天候によって微妙に変わる海の色。掲句は雁渡しの頃の伊豆の海の蒼さを活写して情趣に富んでいる。

さて、波音に目覚め、浜風に癒されて眠りにつく彼女の日常は海と共にある。海にまつわる句が多いのも頷けるし、句集名にもなっている所以でもある。

どの道を抜くも渚明易し
潮の香の肌まつはる朝ぐもり

そんな彼女の多忙な生活の中でも、一息つける休息の日々を詠んだ句も見逃せない。

どこからか蛙の声や休診日
休診の札やしきりに飛花落花

そんな休日には京都への旅行を楽しみ、健康の為に始めたゴルフに興じ、又人の健康と命を預る生業故か正月に開かれる縁起物を売る達磨市にも足を運ぶ。

秋しぐれ京都を過ぎしあたりより
山笑ふゴルフクラブの届きけり

冷やかしのつもりが買うてだるま市

「茶道やゴルフ、加えて俳句と趣味三味の優雅な日々を、勝手に想像していた。何うと、はる子さんは医院のレセプト、薬品や会計管理等、裏方全般を任されていると言う。」と序文は続く。

そんな彼女の生活の断面を詠んだ句にも注目した。

ごさぶりを叩くルビーの指輪して
スリッパの散らかつてゐる猫の恋
不器用は不器用なりに衣被

ごさぶりは夜行性だから時には夜、寶石ジュエリーのルビーは、御招待とか慶事につける指輪。帰宅して玄関を開け灯りをつけるとごさぶりがちよろちよろ。思わず傍にあつたスリッパを掴んで追い回すはる子さん。恐らくごさぶりは殺められずに逃げ去つた。とのシチュエーションが成り立つのである。

序文はエピソードへと進む。

「昨年末（令和一年十二月）ご主人は三十数年続けられた医院を惜しまれつつ閉じられた。」

噂もう広まつてゐる梅雨の明

句会の終つた帰り道、彼女から閉院するという話を聞いた。そう、あの日は梅雨の明の頃だったのだ。

因みに私は一切他言していません。念の為（笑）

駅弁を開けば春のにぎやかに

句集の帯に載る代表作に添えてパロディーで一句。

（春潮を開けばはる子の笑み浮かぶ）

明朗闊達な彼女の居る所、笑顔が絶えない。

この句集「春潮」は、はる子さんの実生活に即した人間味豊かな珠玉のアンソロジーと言えよう。

句集「春潮」好評発売中。三千円（税・送料込）

住所 〒256・0812 小田原市国府津3-10-4

TEL 0465-47-9966 伊藤はる子

俳句おだわら（12・19メ切り、到着順）

◆鹿火屋（11・27）

久江報

元氣村胸突き坂の蜜柑山

足立 和子

励ましの茶柱二本今朝の冬

川本 育子

身に沁むや読経に響く大太鼓

高橋 小糸

社への道のあと先菊日和

山崎 悦子

冬紅葉裏もおもても水鏡

近藤 久江

◆春野（11・15）

きよ志報

捨て墓に曼茶羅のごと赤まんま

秋山 昇

冬うらら髪分け目を変へもして

内田知江子

転生の果ての綿虫かもしれぬ

尾崎 一夫

垂直に冬の来たりぬ新宿区

瀬戸 悠

母と居て眠くなりたる冬日和

二見 和江

立冬のたたみかけ来る波の音

伊藤はる子

菊の香の頂にゐて師の笑まふ

長谷川きよ志

◆香雨・梅ごち（11・22）

忠山報

鉄瓶の湯気の傾き隙間風

肥後ちさこ

茶の花や富士山頂に白きもの

関戸わよこ

古書店の貼り紙めくれ隙間風

青山 典子

いつになくながき湯浴や冬はじめ

門松 鳳文

竹林の節の伸びやか小六月

乾 利子

茶の席のどこからともなく隙間風

吉田 百代

名筆の襖抜ける隙間風

吉田 康雄

懐かしきものに貧しさ隙間風

陌間みどり

隙間風夕餉の膳を覗きけり

小澤 純子

丘といふ大きな日なた小六月

池田 忠山

◆こよろぎ（12・10）

つとむ報

倒木へ足掛け跳ぶや虎落笛

板谷 雅泉

酒蔵に特売の札冬ぬくし

植松テル子

初冬の白くつきりと朝の富士

神山つとむ

◆沈丁（12・5）

文字報

クリスマス・イブ膝の猫裏返す

寶子山京子

三密の一つ失念としわすれ

牧石美千雄

冬の月束ねし手紙読み返す

若村 京子

風の色街の色足し聖樹かな

柳澤ミサ子

介護食にケーキの付きてクリスマス

田中 恵一

フランスは黒白まじるサンタかな

河本 純子

ジョンレノン流るるままにクリスマス

瀧本 敦子

交番のアクリル板にクリスマス

勝木 澄子

賄いの素うどん啜る聖夜かな

菅野 英余

青空に湖面の紅葉境なく

高井 幸子

耳も目もまだ楽しめりクリスマス
寸劇は羊の役よりクリスマス

片野 節子

中野 文子

◆みなみ(11・14)

かほる報

山茶花や五百羅漢に父探す

飯田 愛

湯豆腐に利尻の海のにほひかな

加藤 健治

小菊買う白ばかり買う道の駅

加藤れい子

川音の響く湯の宿夕時雨

村上 龍山

文化の日昭和生まれを愉しめり

加藤 富江

葉牡丹や老いは静かに本音秘す

加藤 幸子

水荒く使う魚屋空っ風

豊田 幸枝

冬の月影の一人が重なりし

市川めぐみ

笹さして霜よけしたるこの畑

小瀬村信子

冬構え昭和風情の鄙の宿

斎藤 静

追伸の言葉足すよう返り花

加藤かほる

◆青梅(12・9)

幸子報

クリスマス子供のを応援す

大塚 行人

田じまいの煙まつすぐ矢倉岳

湯本とし子

指笛の音の身にしむ秋の暮

和田 櫻子

小葬ひ冬田に群れる鴉かな

加藤まり子

着ぶくれて野良着の裾のよごれかな

久保寺トミ子

女人寺若き庭師の歳の暮

田渕 令子

小春日の縁のお茶請けカステラ

田中 幸子

◆たけのこ(12・9)

悦女報

済んだ事もう済んだ事花八手

小宮 早苗

パーキンソンの疑いありや石路の花

徳田 公子

大根の穴ぼっかりと日暮れかな

久津間百合子

釣り上げし大甘鯛よ優勝す

三木 泰子

軒先を借りる山家の大根干し

宮崎 悦女

◆おほみ(12・9)

昌男報

冬木の芽命の賛歌うたいをり

二上 光子

放課後の図書室一人冬めきぬ

石井きよ子

玉手箱科学のめざす冬銀河

石井千代子

マスクして表情読めぬ人ばかり

宇田川聖一

一年が記録映画となる師走

小野 菊土

足音か期待はずれの落葉風

香川 花子

昼下がり首だけ出して炬燵の子

風間 秀泰

葛湯飲み気構え少し緩めけり

加藤 春江

冬籠りスマホに励む老人よ

坂入清四郎

冬障子真白白のははの部屋

瀬戸とみ子

時刻む良くも悪しくも十二月

高橋みどり

白髪葱余生は涙もろくなり

中津川晴江

柗の花夕映えに乱反射

中根登美子

冬ぬくし生きる力となる電話
冬桜岐路の選択良しとして

中村 昌男
廣田 悦子

◆山北(11・26)

由里子報

檜の香ただよう湯船ちちる鳴く
人類は道化の途中冬夕焼
もうつばさ拡げてもいいですか冬

高橋 秋月
尾崎 竹詩

冬日和切り株老の指定席

中山 妙子

花柵滑りの悪い玄関戸

和田恵美子

孤高なるさかさ富士なり水の秋

石田加津子

雨晴れて裏山は早や薄紅葉

尾崎 幸子

銀行員専用出口青木の実

柳川 楊雨

◆開成(12・4)

ちわき報

すべり来る遊覧船や山眠る

竹下由里子

富士見ゆる裾野は果てし山眠る

遠藤シヅ子

山眠る風の変わりし日暮れ時

下澤 操子

柿落葉横断歩道カラカラと

濱本 主雄

◆零(12・17)

道郎報

朝晩は森ヒンヤリと藪柑子

奥津ちわき

冬のダム湖流木のただようばかり

青木たけを

着ぶくれて車に乗るのも大変だ

岡本 史郎

年の瀬の夜間飛行の音重し

井上 良子
川合 昌子

日和かなひとひと人出一葉忌

佐藤 正子

屈むほど姫可愛らし藪柑子

中村 裕子

被災の地身にしむ風の中に立ち

野川木一路

着ぶくれて縄文人の貌になる

木村 和彦

障子貼る忘れたきこと封じつつ

伊藤 道郎

◆実のり(12・17)

たか志報

どの鳥も左向き寝の浮寝鳥

岩本ひさみ

星明かり波の間に間に浮寝鳥

杉本 久子

夕映えの足柄平野浮寝鳥

木村 幸枝

大根の肩抜き揃ふ在所畑

新井たか志

◆鷹(12・11)

十五報

廢線の駅舎に猫や冬桜

青木 孝子

喪の葉書十一月の雨滲む

池田 令子

皿小鉢ふれて音せり神迎

西賀 久實

片目だるま疫病の年の詰まりけり

佐宗 欣二

数へ日や築地市場の乾物屋

須田 晴美

まつすぐに東名の灯や冬の月

中田 笑子

北吹くや市場に干物煙りをり

百川 秀子

スプレー菊ゆれて黄色の輝けり

山崎美知子

茶の花やなべて小ぶりに尼の寺

庄司 下載

忙しき日ある嬉しさや花ひらぎ

瀬戸 りん

秋深し湖面の富士の乱れざる

画鋏照る案内板や小鳥来る

伴走の握るロープや冬ぬくし

小灰蝶草を擦り行く小春かな

がまずみの紅もひとしほ瞽女峠

実紫起居てきばき子の来る日

買ひ置きのはがき参十実千両

八キ口の猫の貫禄漱石忌

山茶花や覗きたくなる塀の節

二股の泥人参や外流し

山畑の荒涼として鴟の声

山の湯に夫と勤労感謝の日

姿見に猫背の吾や事始

葉牡丹や老爺一人の金物屋

過疎の地に人語を聞かず冬の鴟

寒拆の路地に別るる街の衆

冬林檎くるくる剥いて喜寿迎ふ

冬の夜やトタン響かす松ぼくり

挨拶の元気な子らよ石路の花

弁当に蜜柑も添へて送り出す
店名を変へて再起の小春かな

高橋久美子

中山智津子

齊藤 桂

芹澤 常子

島 梅乃

山口安規子

市川 好子

大島美恵子

田下 昌人

中根 和子

高橋 正子

西村 英子

米山 翠

大木 敬子

加藤 幾代

北崎 修

守屋 まち

來田 新子

大沢 年子

片野 秋子
小林 環

山の影田んぼ飲みゆく冬至かな

拳あらば面白からむ寒鴉

海風に匂ひ増したる花八手

十二月八日血圧正常値

庭の日の移ろひ早し賀状書く

ぐちやぐちやの夢の朝や寒鴉

◆雫 (12・19)

月冴ゆる心は歌うむかしうた

冬の陽は血眼如来までとどく

悪党をそのまま生きて去年今年

◆無所属

今生をまだまだ蛇行冬の川

盗人や間垣一枝の冬薔薇

読了の完の一文字冬の月

薬師堂子等でいっぱい豊の秋

年惜しむころがるようなコロナ禍よ

羽子日和路地に昭和の音を突く

山門までの黄落両脇に

年用意指に食い込むレジ袋

パズル解けるごと草綿の実の弾け
漆を搔くアマゾンでは地球を搔いてる

近藤 絢子

杉崎 せつ

関根 琉子

鳥海 壮六

古屋 徳男

村場 十五

重満報

井上 和子

佃 悦夫

佐々木重満

小林永以子

山口 千代

一ノ瀬茂代

出澤 洋子

鈴木久美子

澤口 文子

蓑宮 わか

木村美千代

青木 勝子

大石 雄介

東の間のおいとま花虻ルリタテハ
冬芒川の話聞いて罪
大石 和子

どんぐりの落ちたる水輪より唱歌
岩楯恵津子
田畑ヒロ子

猪の毘たぐり寄せたる鉄輪かな
山田 照子
穂坂志げる

ぐさりぐさり冬の鉄骨われら酔う
父祖の地に関所の掟みかん山
北村 文江

遮断機の向うの顔も師走かな
小澤 園子
岡田 典代

値下げ札付けた小犬や年暮れる
秋入日おんぶバッタの交差点
須田 聡子
誰れかに何かを知らせたかつた冬木
瀬戸 正洋

蛞蝓の錬金術師たる所以
小島ノブヨシ
杉山あけみ

冬の蠅ころぶ奥歯が痛むのか
門松鳳文抄出（青木勝子）一ノ瀬茂代

灯ともせばひと間みづいろ盆灯笼
池田 忠山
夕暮の座敷にいまだ残暑座し
石井きよ子

枯蓮狩る澱に重き一歩かな
一ノ瀬茂代
足立和子抄出（伊藤はる子）奥津ちわき

葛咲くや御殿場線の軽き音
岩本ひさみ
雨続き黙して佇む稲架愛し
宇田川聖一

岩清水太古の水と思ひ飲む
奥津ちわき
石井千代子抄出（尾崎一夫）川合昌子

スクラムを組んで丹沢冬構
尾崎 竹詩
万葉の恋はひらがな歌かるた
加藤かほる

日溜まりは母のふところ柿落葉
加藤 幸子
田中恵一抄出（川本育子）坂元一義

田中恵一抄出（川本育子）坂元一義
抜け道は十葉明り尽くるまで
木村 幸枝

ふんわりと座ってみたい春の雲
小瀬村信子
葉の裏に双子のような蟬の殻
坂入清四郎

古屋徳男抄出（佐々木重満）高橋秋月）
つばくらめ四囲の田園消えむとす
佐宗 欣二

亡き母に問うこと多し秋の声
佐藤 正子
退耕の父に筍流しかな
芹澤 常子

久津間百合子抄出（高橋千代子）中野文子）
頬杖の外れてからの夜長かな
田下 昌人

風の音水の音にも秋深む
徳田 公子
皺の数増して旨味の干大根
中津川晴江

一ノ瀬茂代抄出（中村裕子）村上龍山）
飛ぶ勇氣飛ばせる勇氣巢立かな
中村 裕子

山葵田を出て奔放な水となる
寶子山京子
探梅や咲いているいる枝の先
蓑宮 わか

（つづき5頁）

令和 2 年(2020 年)12 月 16 日

小田原俳句協会 様

小田原市長 守 屋 輝 彦



小田原市制80周年記念表彰について

初冬の候 ますます御清祥のこととお喜び申し上げます。

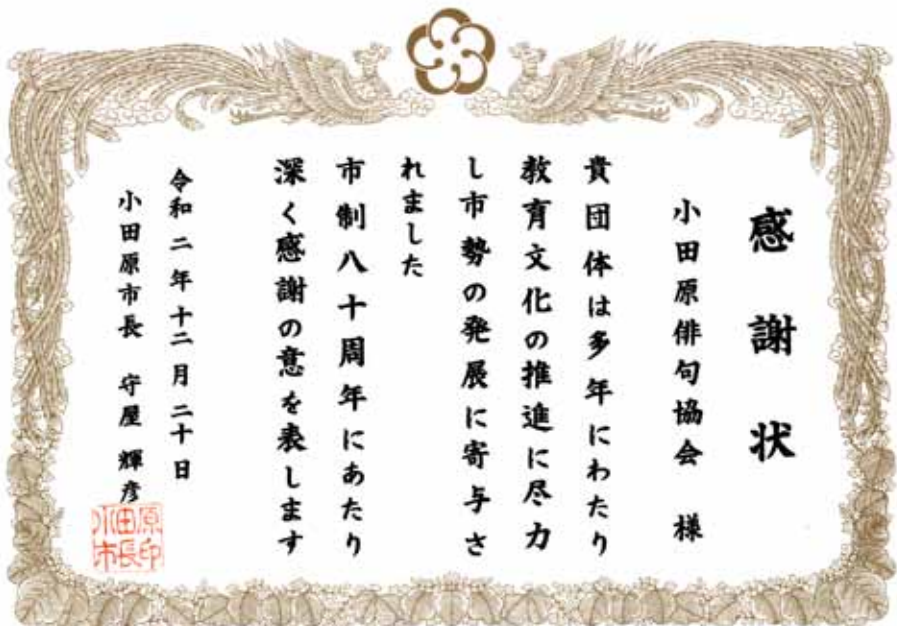
平素から市勢発展のため格別の御協力を賜り厚くお礼申し上げます。

この度は、多年にわたる御尽力に感謝いたしますとともに、小田原市制80周年記念表彰を心よりお祝い申し上げます。

過日、御連絡差し上げたとおり、本来であれば式典を開催して 小田原俳句協会 様の御功績をたたえ、感謝状等を贈呈するところではあります。新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、誠に遺憾ながら、今回の式典開催は見送ることとしました。

つきましては、感謝状等をお届けさせていただきますので、お納めください。

(事務担当：総務部総務課総務係 遠藤 0465-33-1298)



第74回小田原桜まつり俳句大会

作品募集

兼題 「桜」「春泥」（いずれも傍題可）

各一句一組、未発表作品に限る

締切 令和三年二月二十七日（土） 必着

整理費 一組に付き千円（句稿に同封、何組でも可）

投句先 〒258・0019 足柄上郡大井町金子一四一

小野菊土宛（電話〇四六五一八三一〇八八〇）

*作品は原稿どおり印刷しますのでご注意ください。
さい。（楷書で、大文字、小文字もハッキリと）

選者 協会役員及び各地有力作家（投句者に限る）

賞 県知事賞以下二十位、選者特選賞六人

作品賞 投句の皆さまに後日送付致します。

*新型コロナウイルス感染対策に鑑み、令和3年
4月4日に予定の第二部俳句大会は中止し、

今回は第一部の事前投句募集のみです。

奮ってご投句下さいますようお願い致します。

〈主催〉小田原市観光協会 〈主管〉小田原俳句協会

〈後援〉各地俳句協会

理事会だより（12・10）

一、立春句会、梅まつり・桜まつり俳句大会の取り組み状況確認。なお桜まつり俳句大会の選者特選賞選者は佃名誉会長・大石顧問・池田会長・グループ（鷹、たけのこ、沈丁、春野）に（事業部）

二、城苑俳句用短冊板の補充（三十枚）を新井顧問のご協力で行なった旨総務部より報告。

三、令和三年度市民文化祭は新しい三の丸ホールのお試し運用期間のため中止となり、俳句大会は当協会単独での取り組みを要するので二月までの理事会で協議決定することになった。

四、市立病院ギャラリーへの短冊掲示は新型コロナウイルスの状況から当面行なわないことにする旨田中幸子理事から報告。

*緊急お知らせ*理事会の後、梅まつりにつき観光協会から「令和2年度小田原梅の里さんぽ俳句大会」へ名称変更するとの通知を受け諸々対応することになった。

理事会日程 2 / 11、3 / 11、4 / 8

第68回定期総会 4 / 22 いずれも木曜日18時より